

丸山下遺跡発掘調査報告書

平成 8 年度地方特定道路整備事業上辰野地区に伴う発掘調査報告書

1997

長野県辰野町教育委員会

序

辰野町にはおよそ250カ所の遺跡が周知の遺跡として遺跡分布図に登録されています。これらの遺跡は、近年の大規模な開発事業に伴う発掘調査によって、消滅したりほとんど姿を消してしまったものも数多くあります。当町は、昭和47年度に中央自動車道の建設に先立って発掘調査が実施されたのを皮切りに、圃場整備事業や区画整理事業といった大規模な事業に先立って、面的な調査が実施されてきました。これらの調査によって縄文時代から中世に至る長い年月の辰野町の歴史が解明されようとしています。

今回の発掘調査でも、調査面積は小さいものの縄文時代前期前半の住居址を調査することができました。この遺構は町内において過去に調査例がなく、当時代を解明するのに非常に大きな成果であったと思われます。

考古学や発掘調査は人間の営みの根源を探る手段です。人間の文化を知り、さらに発展させていく為にも、ここに皆様方の深いご理解とご協力をおねがいいたします。

平成9年10月

辰野町教育委員会

教育長 小沢 幸彦

例 言

1. 本書は地方特定道路整備事業上辰野地区に伴う長野県上伊那郡辰野町大字辰野1,420番地の1ほかに所在する丸山下遺跡^{まるやましたいせき}の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は辰野町教育委員会が実施した。なお、発掘調査の組織については発掘調査関係者名簿として別掲した。
3. 発掘調査は平成8年12月2日から平成9年3月14日まで現場の作業を行い、平成9年4月1日から平成9年8月29日まで遺物等の整理および報告書の作成を行った。

発掘調査関係者名簿

丸山下遺跡発掘調査団

調査団長 小沢幸彦（辰野町教育委員会教育長）

調査員 福島 水（辰野町教育委員会社会教育課）

発掘調査協力者 板倉たせ子、大森淑子、長田作衛、垣内諭、桑沢とよ子、茅野安男、中谷あき子、宮沢英子、山崎馨、山崎誠

整理作業協力者 赤羽弘江、宇治ひろみ、大森淑子、工藤信子、佐藤直子、白鳥栄子、竹内みどり、村上茂子

目 次

序

例 言

I 調査の経緯と経過	1
II 発掘調査	1
III 位置と環境	3
IV 遺構と遺物	4
第1号住居址／第1号竪穴／第1号土坑／第2号土坑／第3号土坑／第4号土坑／第5号土坑	
V その他の遺構と遺物	9
VI まとめ	15
丸山下遺跡全体測量図	16
写真図版	

I 調査の契機と経過

保護協議の経過

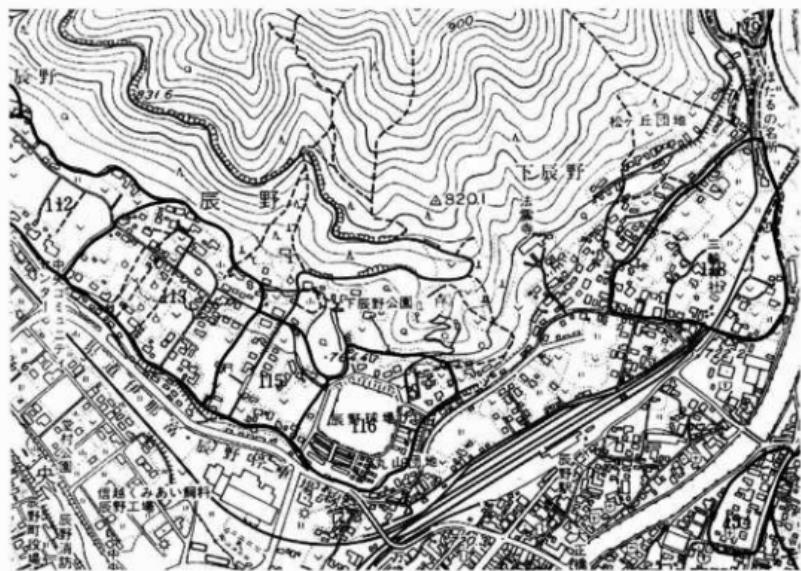
平成7年10月12日に実施された平成8年度公共事業に係わる埋蔵文化財の保護について長野県教育委員会文化課をはじめての保護協議を行ったところ、丸山下遺跡が町道建設に伴って破壊される恐れのあることが判明した。町建設課によると平成7年度中に用地買収を完了させ、平成9年度までには工事に着手する予定であること等説明があった。これに対して町教育委員会としては、この地域がかつて一度も調査が実施されておらず、遺跡の状況が充分把握されていないことを説明し、事前に試掘調査を実施した後に、その成果をもとに再度協議を実施することとした。買収が完了した平成8年12月2日から12月26日まで試掘調査を実施した。その結果、対象地区の東端部で住居址が検出されたため、現地で再度保護協議を実施、気候の暖かくなる3月にこの調査区東端部約150m²を本調査することとした。本調査は3月5日に重機を投入し、3月14日まで実施した。

II 発掘調査

調査の方法

丸山下遺跡は今までに調査を実施したことがなく、詳細については十分に把握されていなかった。このため、開発対象地域全面で試掘調査を実施し、保護協議に必要なデータを収集した。試掘調査については重機によって遺構検出面と思われる深さまで掘り下げ、ジョレンを使用して遺構の有無を確認していく。発掘が終了した後、調査位置及び土層の記録を行った。この時点で本調査を実施する地点を確定し、本調査に移った。本調査は、まず重機を使用して遺構検出面まで掘り下げ、以降は手作業で進めた。遺構が検出された時点では移植ゴテ等を使用して、土層観察用を残しながら掘り下げていった。遺構の床に近い部分より出土した遺物は出土位置に留め、平面図に記録した後、レベルを入れた順に番号をつけて取り上げた。遺物を取り上げた後もう一度床面を精査し、記録をとった遺構もある。記録の方法は断面測量については1/20を基本として水糸によって水平を合わせて測量し、平面図もやはり1/20を基本として平板を使用し、一部の遺構は造り方によって測量したものもある。また、遺構全てについて35ミリカメラを使用し、モノクロームネガフィルムと、カラーポジフィルムで記録写真を撮影している。

遺物整理にあたっては遺物台帳を作成し、出土位置・年月日・遺物の種類等を記入し、遺物には遺跡の略称(MYS)及び番号を注記した。なお必要に応じて遺構名を注記した遺物もある。遺物の記録写真については6×7カメラでモノクロームフィルムをもちいて撮影した。



第1図 遺跡分布図

Ⅱ位置と環境

地理的環境

辰野町は、西を木曾山脈の最北部にあたる経ヶ岳（標高 2,296.3m）より連なる標高 1,100m 以上の 6 つの山塊が占め、東には伊那山脈の北端部が延びている。伊那山脈は天竜川の支流の一つである沢底川を境として、南部は標高 700m～1,200m の小式部城山塊、北部は標高 800m～1,000m の東山丘陵に二分されており、東山丘陵は辰野町でも最もなだらかな丘陵状の山地となっている。

さらに天竜川西部には、その支流である経ヶ岳に源を発する横川川によって形成された横川渓谷に代表されるような V 字谷が深く入り込んでいる。

一方、諏訪湖に源を発する天竜川は、町を南北に縱断するように南流し、その両岸には数段の河岸段丘を形成しており、特に荒神山の南側でその発達は顕著である。そして天竜川西岸、特に諏訪山～桑沢山山麓では扇状地が重なりあった複合扇状地が形成されている。

また、伊那盆地の西部や東部の山麓には大きな断層が走っており、特に西部山麓の断層は「伊那谷断層」と呼ばれ、後山地蔵においては断層によって尾根が孤立し、稗塚と呼ばれる丸山が形成されているほか、西方の明神山は古い扇状地が活断層によって持ち上がったものである。これらの断層はさらに天竜川右岸をさかのぼっていくものと、大城山の西の麓を通るものとにわかれさらに北へとのびている。このうち、大城山の西にのびる断層は、今回調査を実施した丸山下遺跡の存在する地盤を持ち上げ、大きな段丘崖を形成したと考えられる。

歴史的環境

上辰野地域は小横川川の氾濫原と、大城山山麓とに大きく分けることができる。また、辰野町の市街地も存在しており、遺跡の存在を把握している地区は大城山山麓にかぎられている。

このうち丸山遺跡(116)は昭和26年にグラウンド造成時に辰野中学校歴史クラブの生徒らによって縄文時代前期前半から中頃の遺物と12基の住居址が確認されている。同時代の遺物が出土している遺跡としては上平出古城遺跡や、一の平遺跡がある。古城遺跡からは塩谷式の土器が出土しているのに対して、一の平遺跡からは花積下唇式の土器が出土している（辰野町誌歴史編）。

また御茶屋敷遺跡(134)からは関山式や、神ノ木式、中越式が出土しており今回調査した丸山下遺跡(115)から出土した時期とはほぼ同時期の遺跡と考えられる。また、丸山下遺跡と同じ段丘上の北の端に所在する堀上遺跡(112)は平成 5 年度に区画整理事業に先立って発掘調査が実施され、縄文土器が出土している。

今回調査した遺跡や、甘露井遺跡(113)の存在する段丘上は柳田半古に影響をうけた長田博治が盛んに石器の収集を行っていた場所でもあった。これらの石器と出土している土器から、石器は縄文時代前期前半のものが多く、打製石斧については前期後半のものと推測し、この地域の狩猟採集から植物食への過渡期の様相を示していると考えられている（辰野町誌歴史編）。

V遺構と遺物

第1号住居址

遺構(第2図)

第1調査区の東部より出土した。住居址は北半分は調査区外であったために南半分のみ調査することができた。現地表面よりおよそ70cmの深さで遺構検出面になるが、長芋を耕作していたために覆土まで擾乱が及び、一部は床面にまでおよんでいた。住居址中央部に焼土を伴うピットが出土しており、このピットが炉であったと考えられる。また、中央部に硬化面が確認できた。住居址内にはピットが多数出土しており、主柱穴を特定できない。

遺物(第6図～第8図)

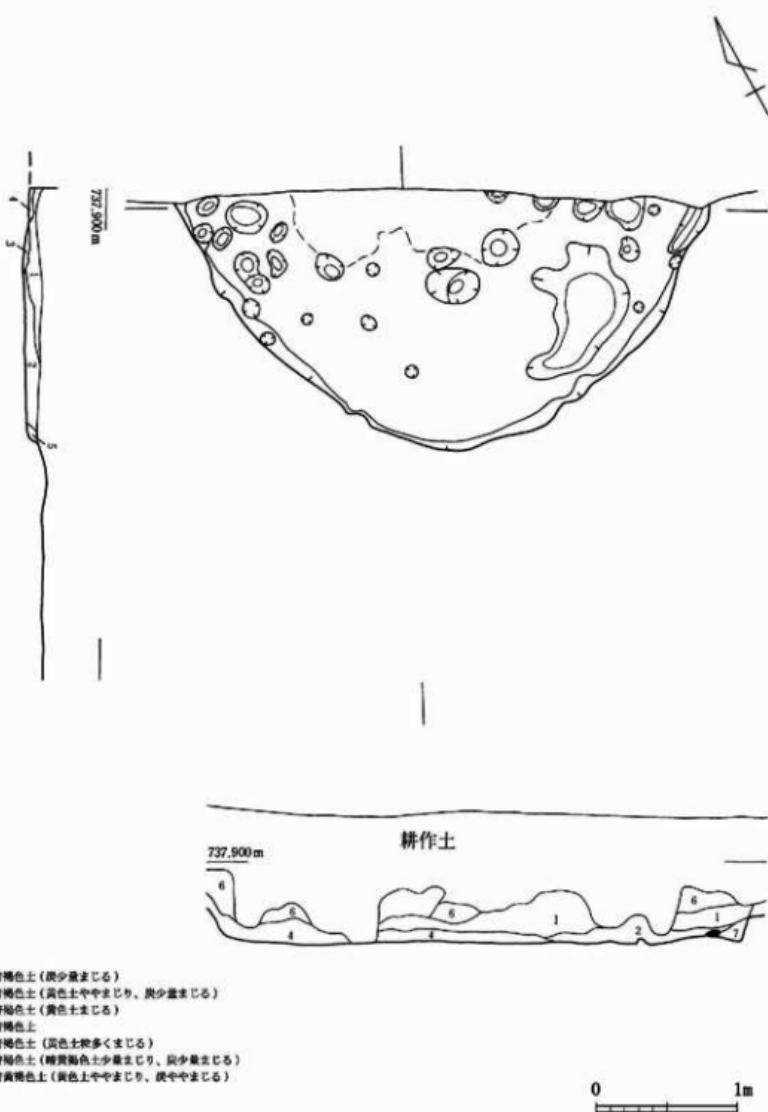
この住居址からは縄文時代前期の遺物が出土している。第6図は床付近より出土した土器である。1～3は表面にあまり明瞭でない羽状縄文を施し、裏面には成形時の指圧痕が残されていた。1は波状口縁で、胎土に纖維はみられなかった。2・3は同一個体で胎土に纖維を混入している。4は波状口縁で、胎土に纖維が混入された縄文を施した土器である。5も胎土に纖維を含んだ縄文を外面に施した土器である。6・7は胎土にやや纖維を混入し、外面には縄文が施文されていた。8は内外面に擦痕がみられる。胎土内には纖維が混入されていた。9は厚みの少ない隆帯を貼り付けた後に櫛歯状の工具を利用して縦位の条痕文を施文している。胎土には纖維は混入されていなかった。10は底部の破片で、外面に縄文がみえる。胎土には纖維が混入されている。11は外面に痕跡程度の縄文が施文されおり、輪積痕を一部に観察することができる。胎土中に纖維が若干混入されている。12は外面に押捺縄文の痕跡が観察されている。胎土内には纖維が混入されている。

13・14は同一個体で、偏平な板状工具によって文様を施文している。胎土中に纖維は含まれていない。15は縄文を施した土器である。底部は平底であり、内面には煤が付着している。

16は外面に条痕文状の施文が見られるが痕跡程度で判明しない。口縁部上端部の外面には煤が付着し、内面には輪積痕が残されていた。17は外面に縄文を施した土器である。胎土中には纖維が混入されている。

第7図1～23は住居址の覆土中より出土した土器である。外面に縄文を施文している土器(1～5・9～13・17～19・22・23)と無文の土器(6・7・14・21)のほかに、櫛歯状工具による刺突を加えた土器(15)や隆帯と条線文を加えている土器(8)もみられる。1には刺突文も加えられている。また、19の土器片の外面の一部と、21の内面には煤が付着している。なお2～4・8・15・18・21・22は胎土中に少量の纖維が混入している。

第8図は石器である。3～7は床面より出土した石器である。1～4は無茎の石鏟で、いずれも欠損している。5は小型の石匙と考えられる。完形ではあるがつまみ部分にくびれは作られていない。刃部は平らに加工されている。6は上部が欠損しているため形体は不明である。5・7・8は石匙であり、7はチャート製である。



第2図 第1号住居址実測図 (S = 1 / 40)

第1号竪穴

遺構(第3図)

この竪穴は第2調査区より検出された。黒色味を帯びた土にトレーナーを入れたところ、硬化面が確認されたため、住居址として調査を開始したが、覆土を掘り上げていくと直径2mの不正円形となった。この南部には偏平な石が置かれ、付近に遺物が集中して出土している。硬化面は中央部付近に一部確認されたのみであった。このことから整理段階で第1号竪穴としている。

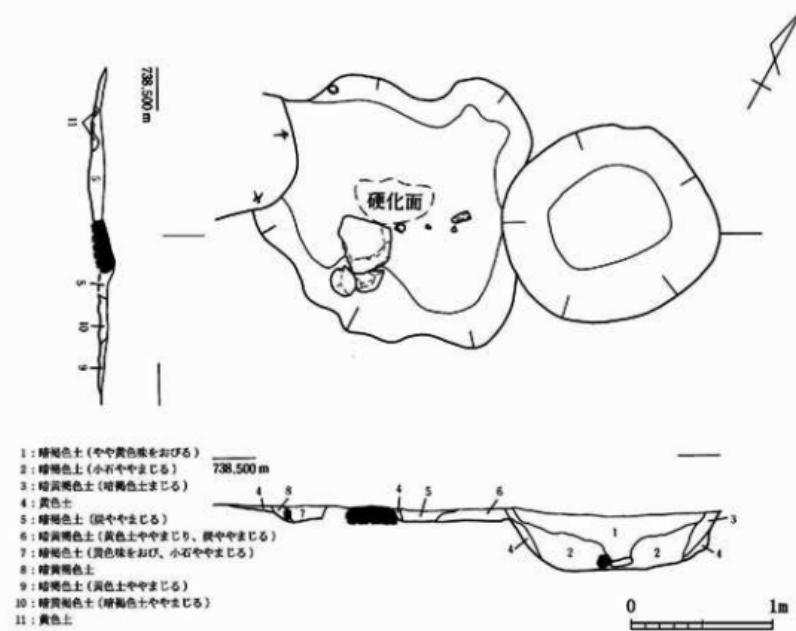
遺物(第9図)

この遺構からの遺物の出土は少なかったがほとんどが縄文時代前期のものであった。

1・2はこの住居址の床より出土した土器である。1は器壁が薄く、無文の土器であり2は器壁が厚く文様は施されておらず、繊維が多量に混入されていた。

3~9は覆土より出土している土器である。いずれの土器にも繊維は胎土に混入されておらず器壁が薄い。5は体部上部の破片で、数単位の頂点を持つ波状口縁と考えられる。また、5・6・9には成形時の指押さえの痕跡が残されている。

10~14も覆土中より出土した土器である。10・11・14は繊維を胎土中に多く混入しており、12



第3図 第1号竪穴・第5号土坑実測図 ($S = 1/40$)

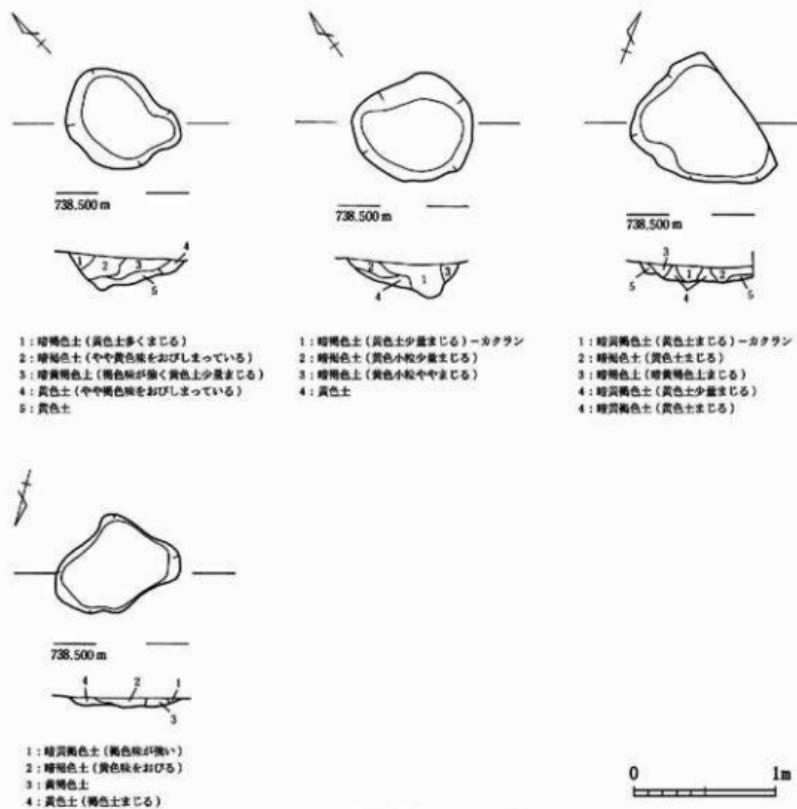
は表面に縦位の擦痕を残している。13は内・外面共にミガキを加えていた。口縁部上部には縄文が施文されている。

15~17は第2号住居址より出土している石器である。15は無茎の石錐であり、欠損品である。16は縦長の石器で、両縁部はよく加工されている。石錐の一類と考えられる。17は石錐である。

第1号土坑

遺構(第4図)

この土坑は第2調査区の中央部付近より検出された。直径80cm×60cmの不正橢円形で、断面形は尖底であった。



第4図 土坑実測図 (S = 1/40)

第2号土坑

遺構(第4図)

調査区中央部やや南西壁寄りに検出された。第1号土坑と同様に断面尖底でありプランは、90cm×70cmの楕円形であった。

第3号土坑

遺構(第4図)

調査区の北東寄りの調査区との境界に出土した比較的浅い土坑である。直径1.1mの不整円形で、一部が調査区外となり、未調査部分を残す形となった。断面皿状をしている。

第4号土坑

遺構(第4図)

調査区北東隅に出土している。直径90cm×50cmの不整楕円形のプランとなっており、断面は皿状となっている。この土坑も比較的浅い。

遺物(第10図1・第5図)

小片のために詳細は不明である。胎土中に纖維は混入されていなかった。やや白色味のある褐色を呈している薄手の土器で焼成は良好であった。

第5図は黒曜石製の石器である。1は無茎の石鏃であり、肩部を作り出している。2は上部につまみ部を作る綫長の形体の石匙と考えられる。

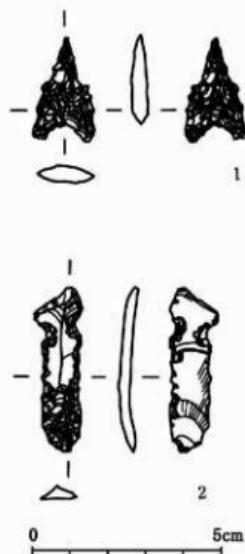
第5号土坑

遺構(第3図)

この土坑は第2号住居址の東部に出土しており、第2号住居址を切って堀り込まれている。直径1.5mを測る円形の土坑は、覆土は黄色土粒が混入している褐色土が中心であり、覆土からみるとやや新しい印象をうける。

遺物(第10図2・3)

2は沈線が施文された土器である。器壁は厚く、中期の土器の可能性も考えられる。3は無文であった。器壁は薄く、第4号土坑の土器片と同じく、やや白色味のある褐色を呈している。共にこの遺物は土坑に混入した土器の可能性が高い。



第5図 土坑出土石器

V その他の遺構と遺物

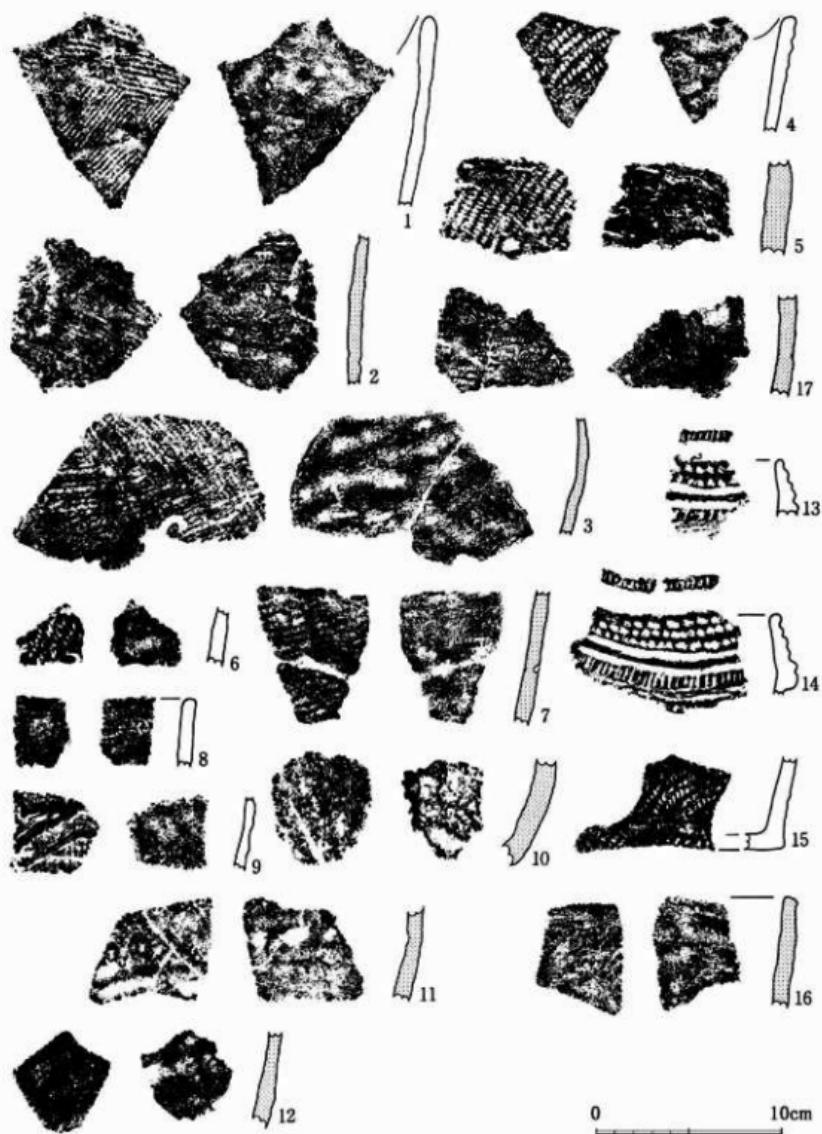
遺構外出土遺物

今回の調査によって出土している土器の主なものを図示している。(第10図)

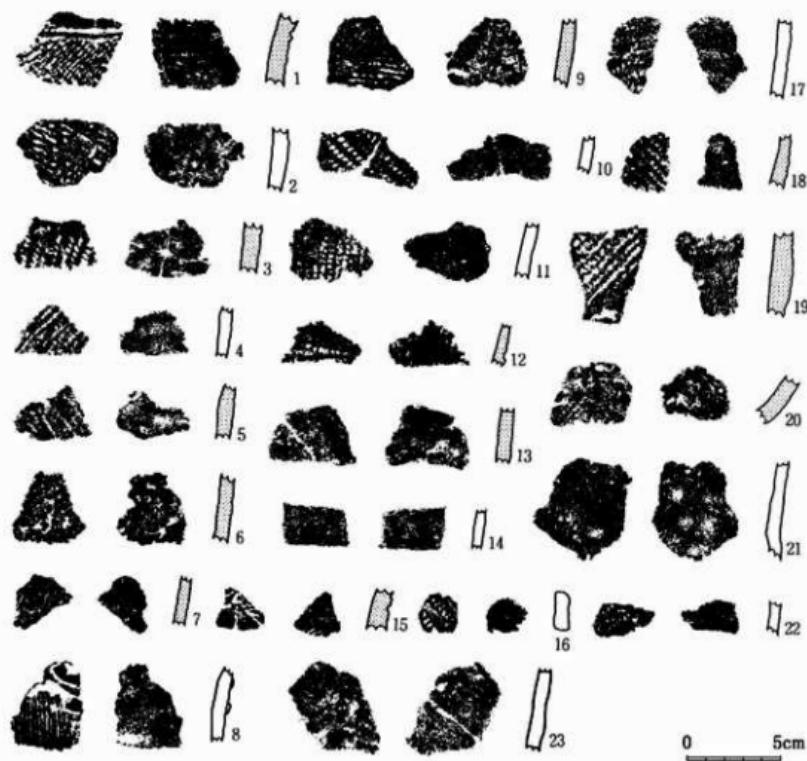
4～7は第1調査区より出土した土器である。4は口縁部の破片で、胎土中に纖維が多く混入している。外面には無節縄文が施文されている。内面には横位のナデの痕跡が残されている。5は外面に縄文が施文され、内面には指押さえ痕が残存している。胎土中には少量の纖維が混入されている。6は外面に縄文が施文されている痕跡を留め、纖維が胎土中に多量に混入している土器である。7は外面に押捺縄文を施文している。胎土中には多量の纖維が混入されている。

8～10は第2調査区地点を試掘調査した際に出土した土器である。8は外面の口縁部に刺突痕を留めているが工具は不明である。内・外面共に横位のナデの痕跡が残されている。胎土中には纖維が多量に混入されている。9は器壁は薄く、纖維も混入されていない。10は外面は磨耗が著しく、調整等は不明である。胎土中には纖維が混入している。

12～19は、第2調査区の西部を試掘調査した時に出土した遺物である。12は無節の縄文を施文しており、内面には横方向のナデがみられる。13は内・外面共に文様や調製痕は確認することができない。胎土中に纖維が若干混入されている。14は縄文を地文としてその上に隆帯を貼り付け一部にキザミを施している。焼成も良好であり、縄文時代中期の土器片と考えられる。15・17・18は無文の土器で、器壁も薄く、纖維も混入されていない。16は胎土中に纖維を多量に混入した土器である。19は外面に縄文を施文した土器である。内面には成形痕をとどめている。縄文時代中期の土器と考えられる。



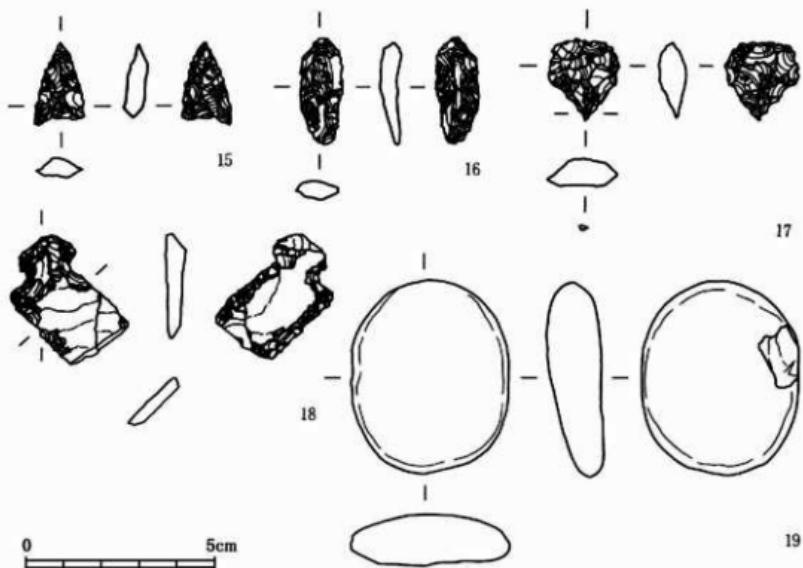
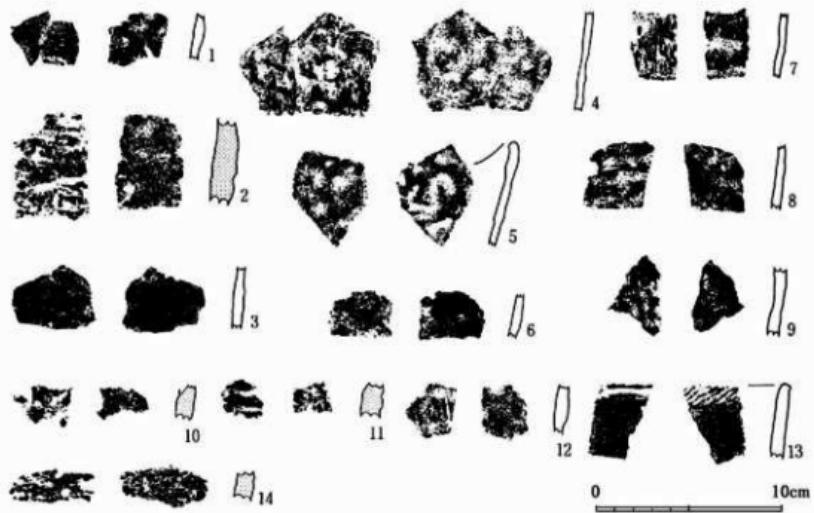
第6図 第1号住居址出土遺物(1)



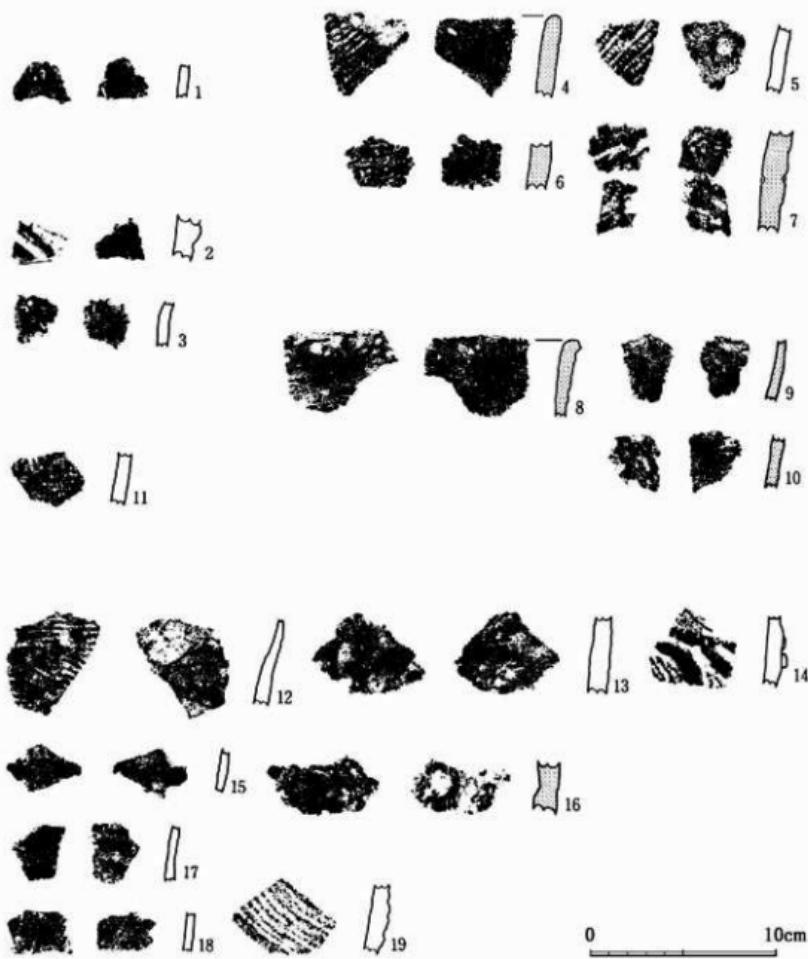
第7図 第1号住居址出土遺物(2)



第8図 第1号住居址出土石器



第9図 第1号堅穴出土遺物



第10图 土坑·遗构出土遗物

VIまとめ

この遺跡の東部に位置している丸山遺跡は昭和26年3月に町営グラウンド造成工事中に辰野中学校歴史クラブの生徒らが中心となって遺物の採集を行っており、その結果縄文時代前期前半から中頃の住居址が12基確認された。残念ながら発掘調査は実施されることはなかったが、明治以来石器が採集されてきたこの段丘上に、縄文時代前期の集落が出土することを証明する結果となつた。また、丸山下遺跡の北西に位置する同じ段丘上の堀上遺跡は曾利式土器が出土している遺跡で、平成5年度に区画整理事業に先立つて調査された。その結果、近世の陶磁器が出土したのをはじめ、内耳土器や縄文時代中期の細片に混じつて前期と考えられる細片も1片ではあるが出土している。しかし、遺構が検出されることなく、遺跡の性格は依然として不明である。

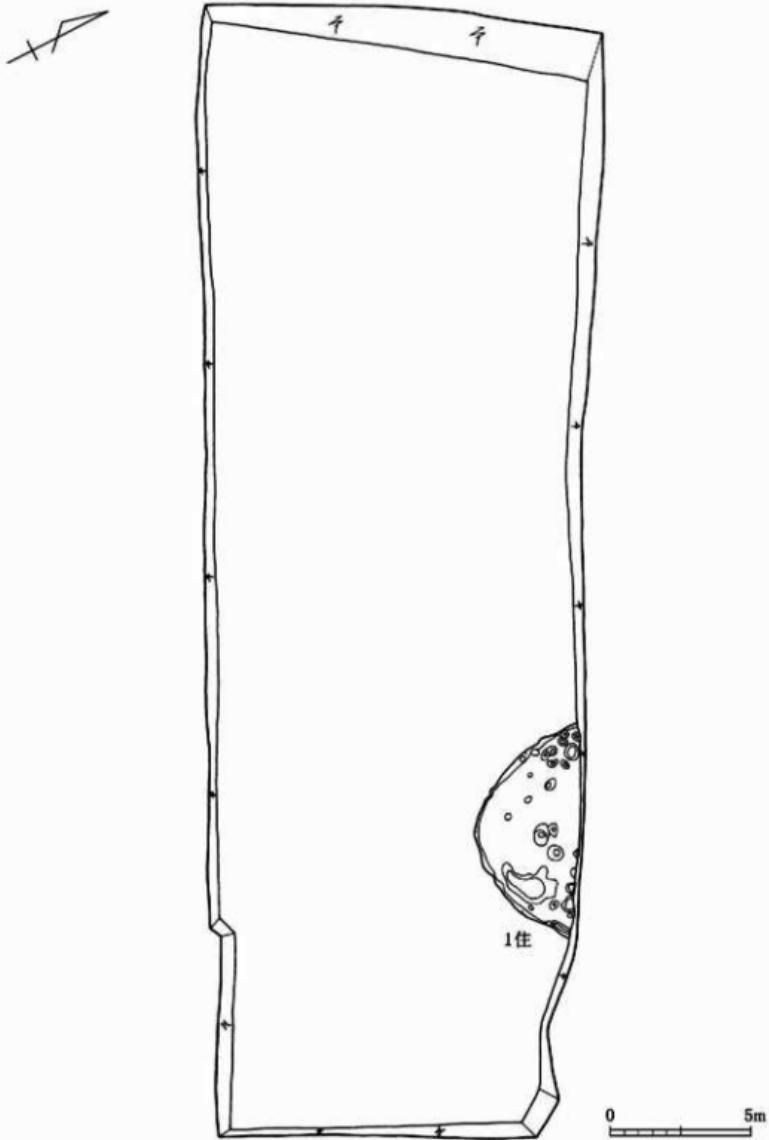
今回の調査では、全長140mのトレンチを遺跡の中央部にあけた結果となったが、調査前の踏査でも遺物の採集量は少なく、遺跡の存在を確認できるほどではなかった。実際試掘調査を実施したが、遺跡の西半部には遺物が散見しているのみであった。地形的にみると、現在道として利用している地点は、その北部の洞より流れ出した沢が天井川を形成しており、大きな氾濫が繰り返されていたことが想像できる。試掘調査においてもこの沢に近づくにしたがって山からの土砂の押し出しが厚く堆積している様子が確認されている。このことは、当時集落を営むには適切な地点ではなかったことを裏付けていよう。

一方東半部からは住居址1基・竪穴1基・土坑5基が出土しており、上層が畑の長芋耕作によって擾乱されていたにもかかわらず遺構は良好に残されていた。土坑からは時期を明確にする資料は出土しなかつたが、住居址からは木島系と考えられる土器や羽状縄文系の土器片が出土しており、縄文時代早期末から前期前半の時期の住居址と考えることができよう。また、丸山遺跡に近接している場所に出土していることから丸山遺跡の集落の西端部とも考えられよう。丸山遺跡の集落は黒浜式や有尾式、諸磯a・b式等が出土しており、出土遺物をみると今回出土した住居址はやや時期が逆上する可能性もある。

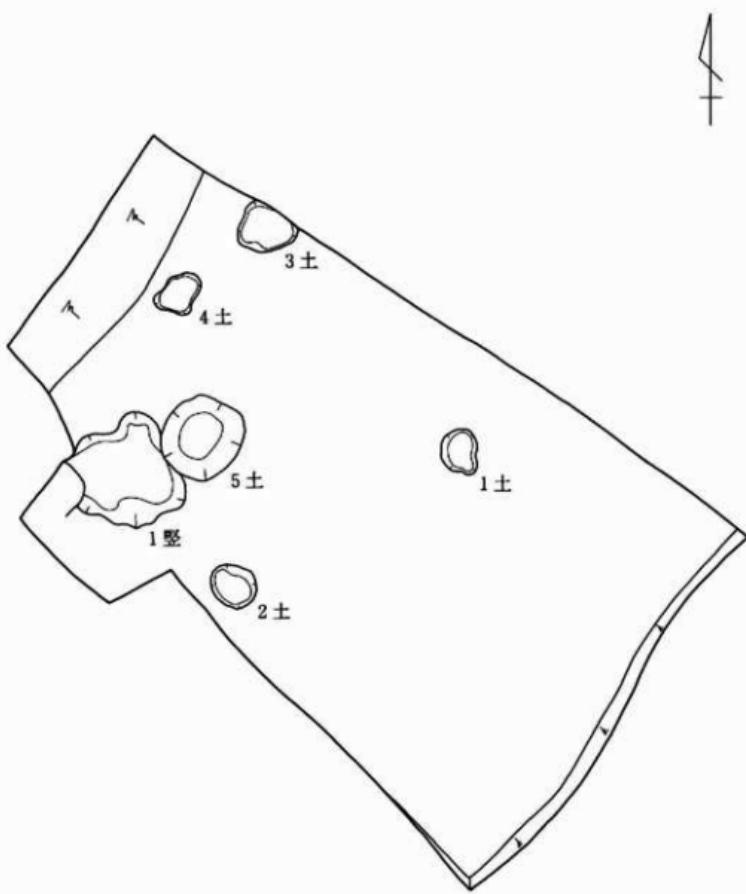
今回の調査において丸山下遺跡の東端部は丸山遺跡につづく住居址がまだ出土する可能性がでてきた一方で西半部については山麓からの土砂の流出に見られるように不安定な地形のため集落を形成するには適さない地点と推測される。しかし段丘突端部ではなく山麓側では住居址の出土する可能性は考えられる。

以前は御茶屋敷遺跡や辰野駅付近より同時期の遺跡が確認されていたが、今回の調査によって一段上段にも確認されたことになり、この時期における集落の配置の問題に関して新たに検討材料を提供した結果となった。

また、中世の遺物として内耳土器の破片が2点採集されており、この時期に何らかの遺構が存在している可能性も考えられる。



丸山下遺跡全体測量図（第Ⅰ調査区）



0 5m

丸山下遺跡全体測量図（第Ⅱ調査区）

写 真 図 版

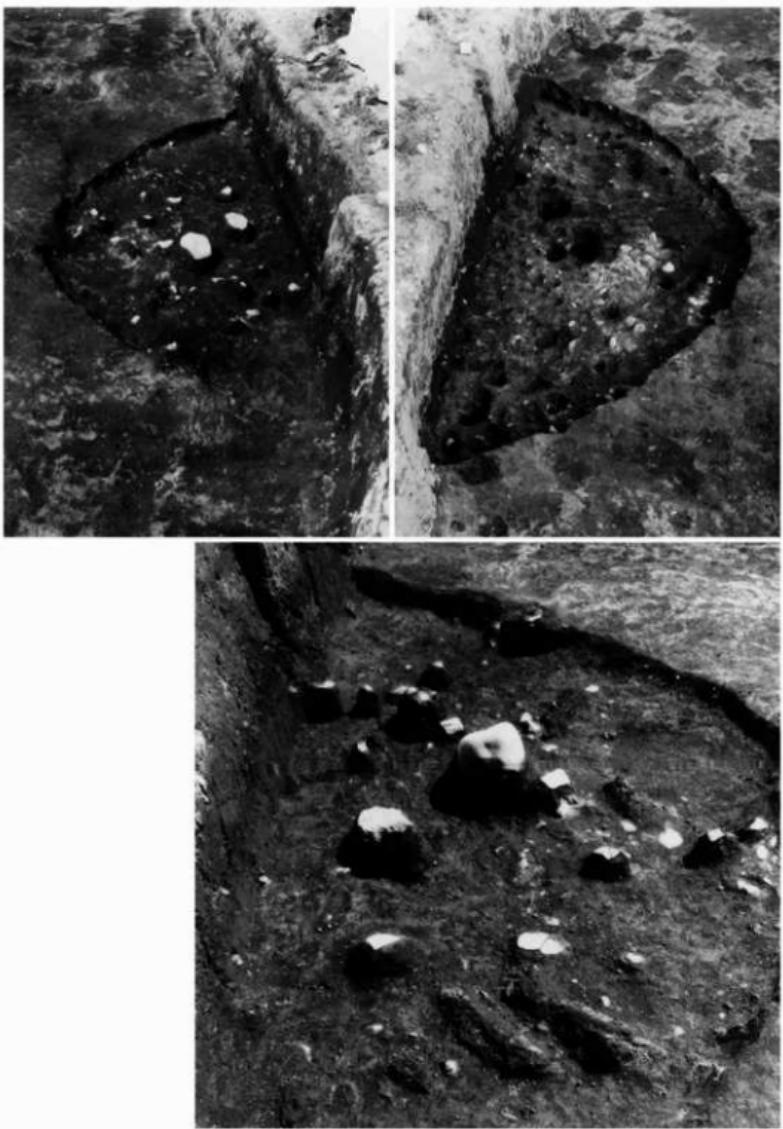


第1調査区全景



第2調査区全景

図版 2

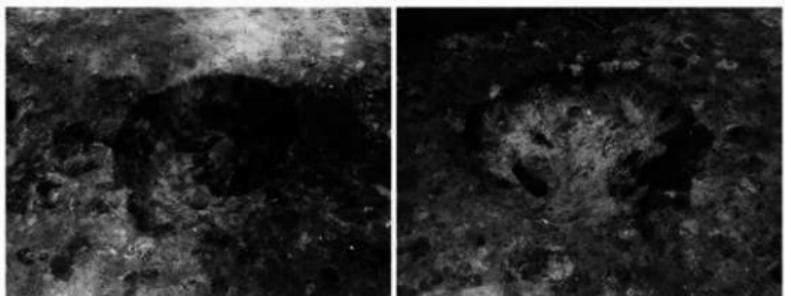


第1号住居址



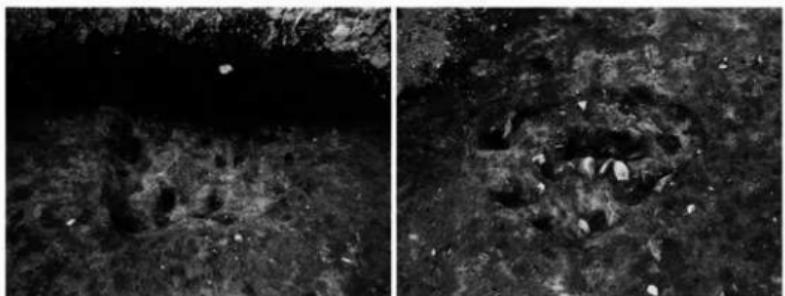
第1号窪穴

図版 4



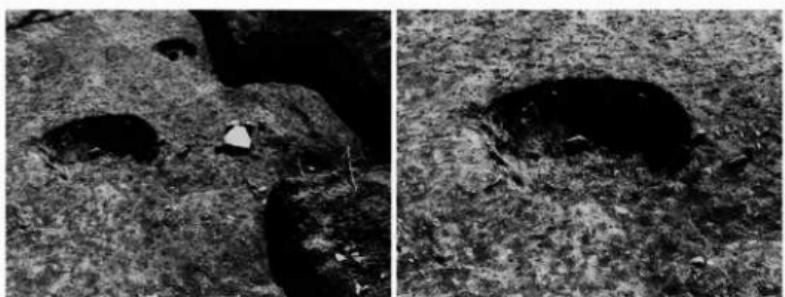
第1号土坑

第2号土坑



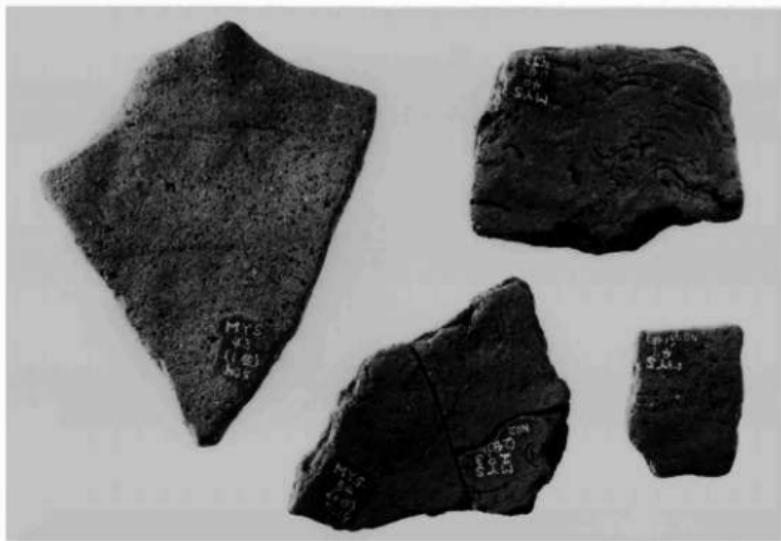
第3号土坑

第4号土坑



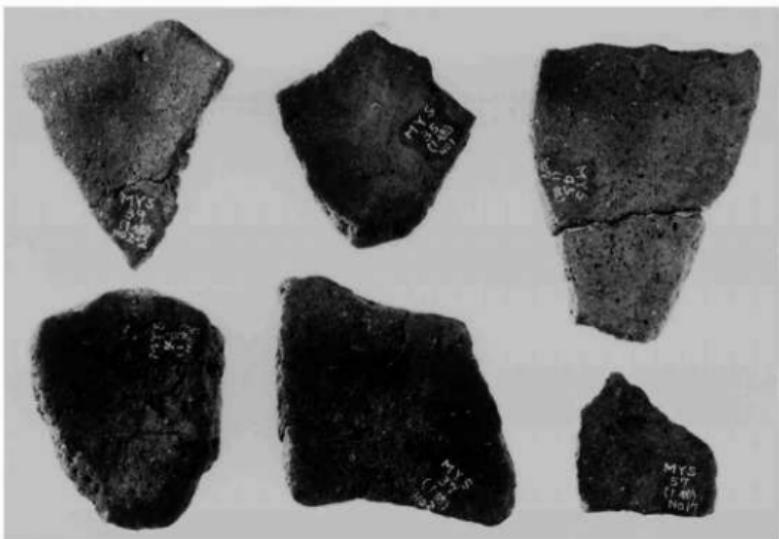
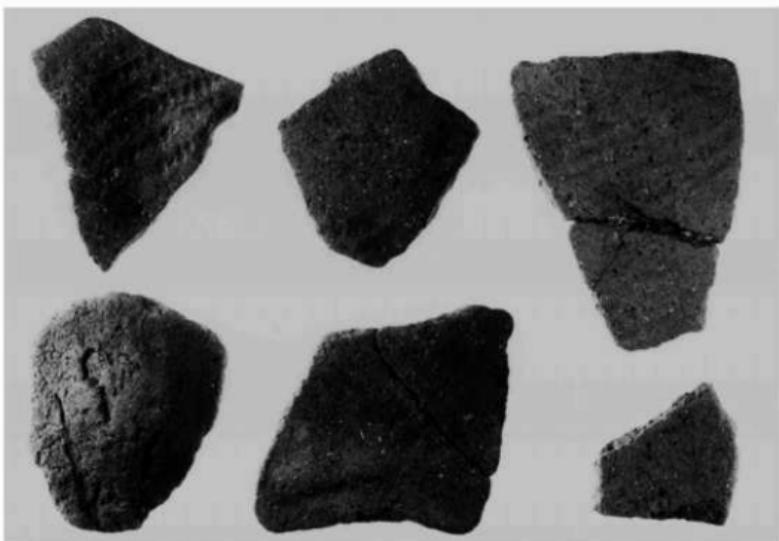
第1号竪穴・第5号土坑

第5号土坑

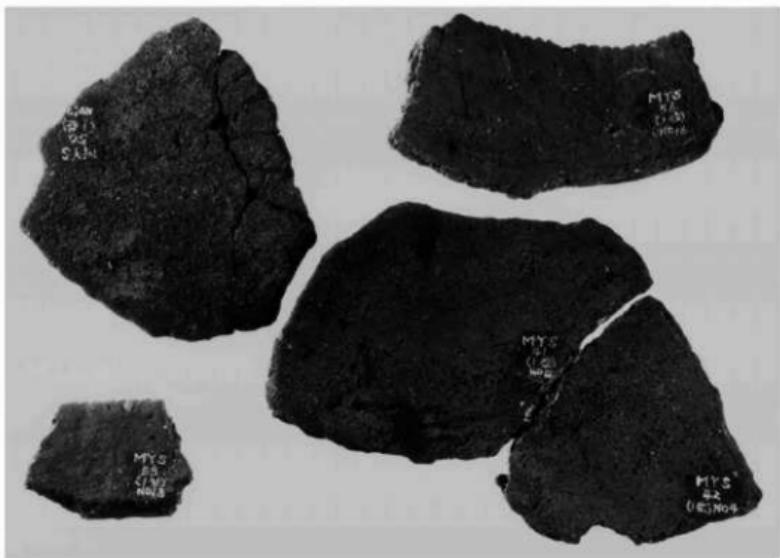


第1号住居址(1)

図版 6

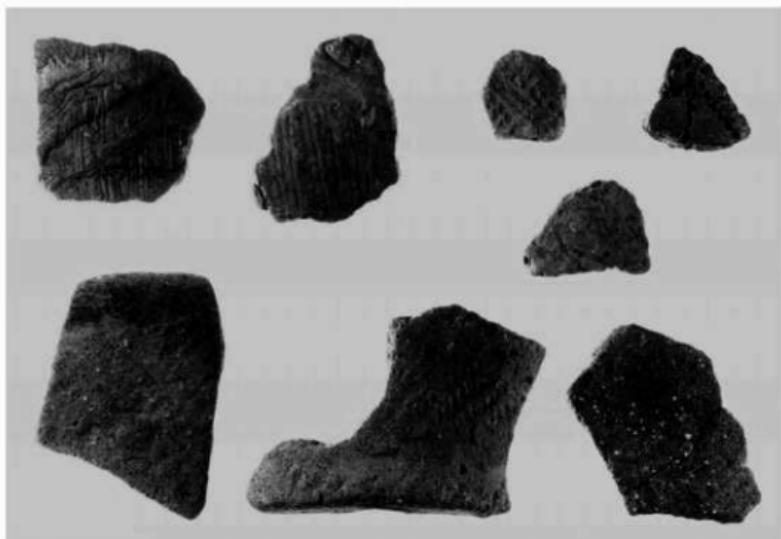


第1号住居址 (2)

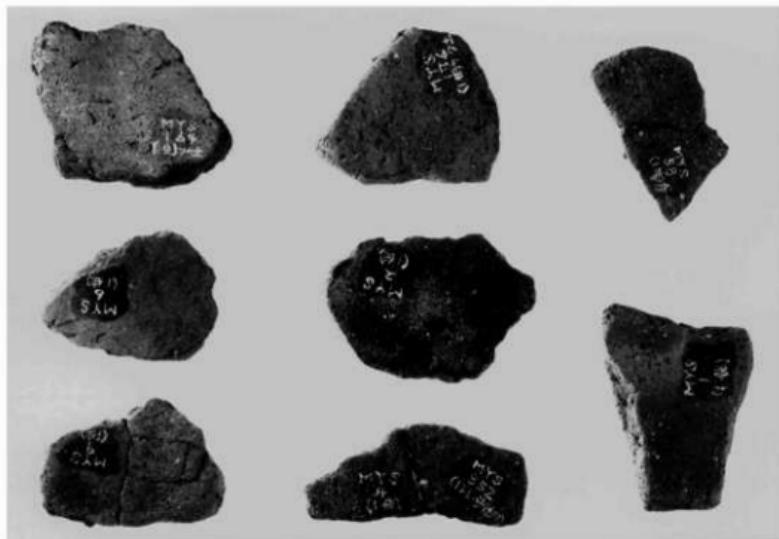
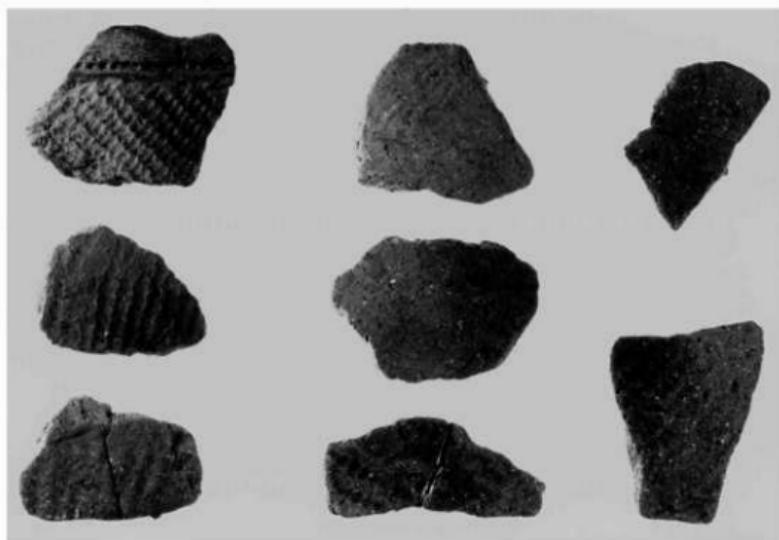


第1号住居址 (3)

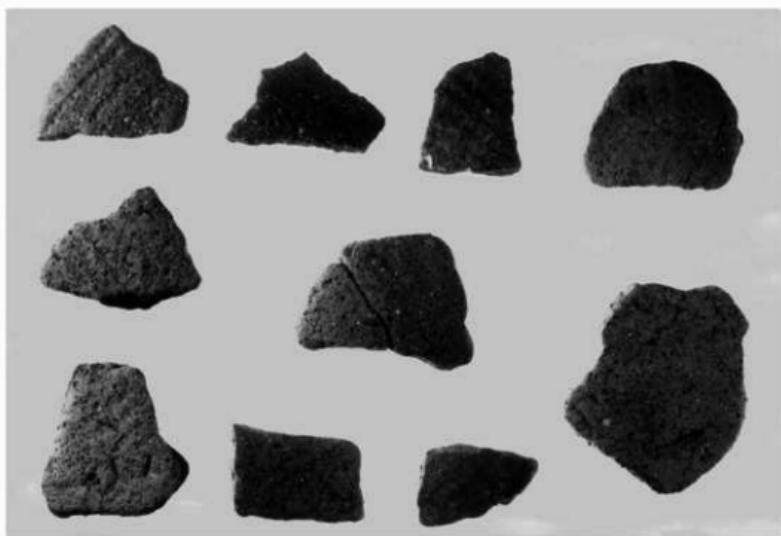
図版 8



第1号住居址 (4)



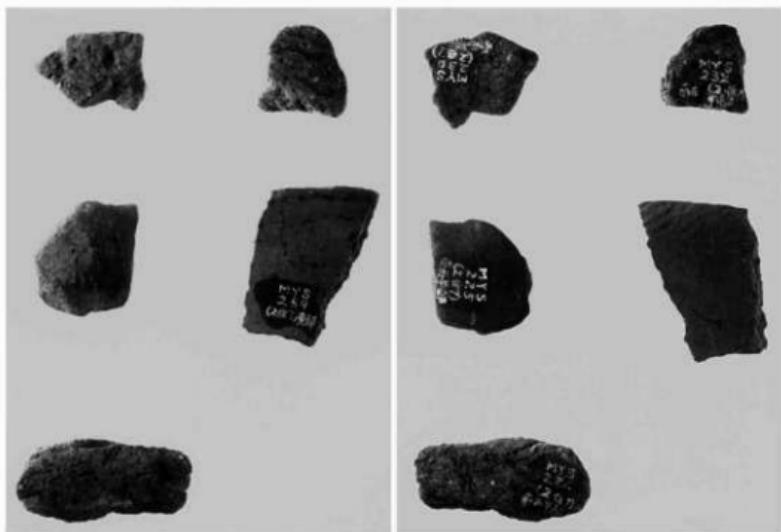
第1号住居址 (5)



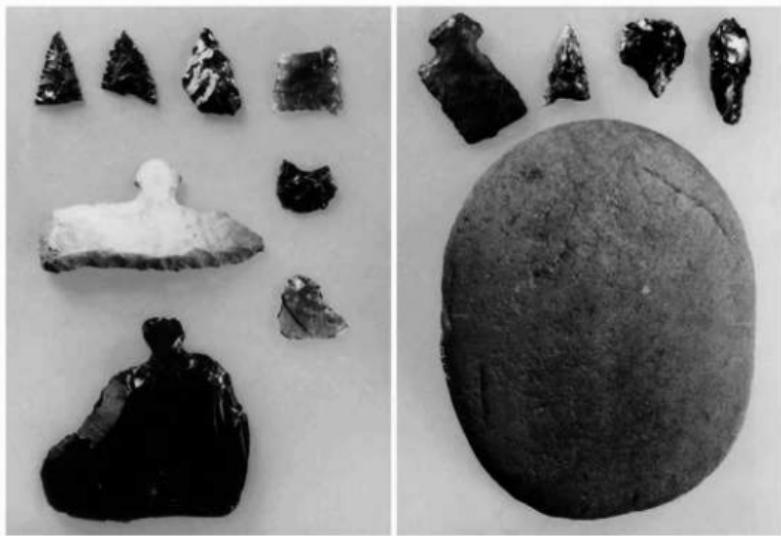
第1号住居址 (6)



第1号竪穴(1)



第1号竖穴(2)



第1号住居址出土石器

第1号竖穴(3)

報告書抄録

ふりがな	まるやましたいせきはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	丸山下遺跡発掘調査報告書						
副書名	平成8年度地方特定道路整備事業上辰野地区に伴う発掘調査報告書						
著者名	福島 水						
編集機関	辰野町教育委員会						
所在地	〒399-0493 長野県上伊那郡辰野町中央1番地 TEL0266-41-1111						
発行年月日	1997年10月30日						
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ° °	東經 ° ° °	調査機関	調査面積 m ²
		市町村	遺跡番号				
まるやました 丸 山 下	長野県上伊那郡 辰野町大字辰野 1,420番地の1他	20382	115	35° 59' 4"	137° 59' 32"	19961202 ~ 19970314	150m ²
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
丸山下遺跡	集落址	縄文時代前期	住居址 1 小堅穴 1 土坑 5	縄文土器	縄文時代前期前半の住居址 や小堅穴が出土し、丸山遺 跡と共にこの段丘の様子が 解明される資料を得た。		

丸山下遺跡発掘調査報告書

平成8年度地方特定道路整備事業上辰野地区に伴う発掘調査報告書

発行日 平成9年10月30日

編集 辰野町教育委員会

発行 ⑦399-04 長野県上伊那郡辰野町中央1

☎ (0266) 41-1111㈹

印刷所 精美堂印刷所

☎ (0266) 41-0270
